

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第3号（6月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

099-296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和3年度 病虫害発生予報 第3号

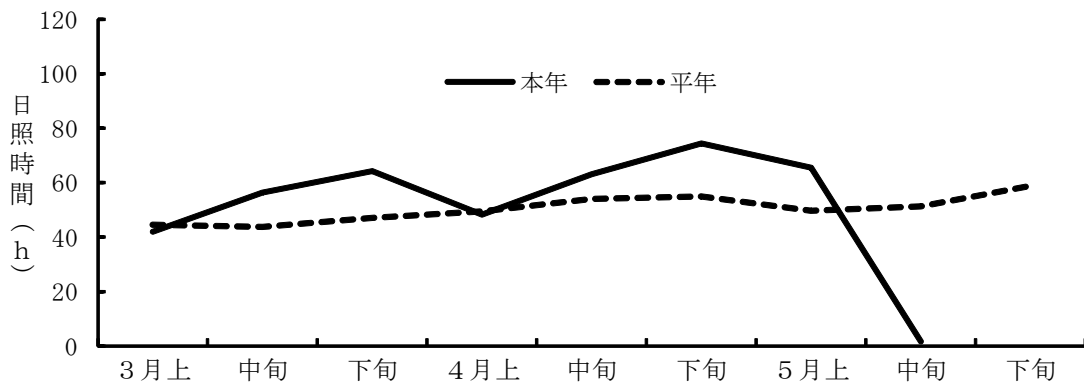
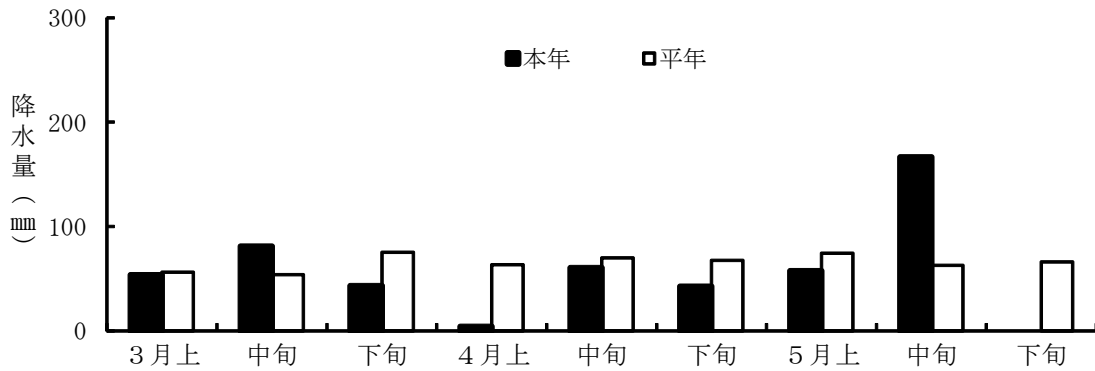
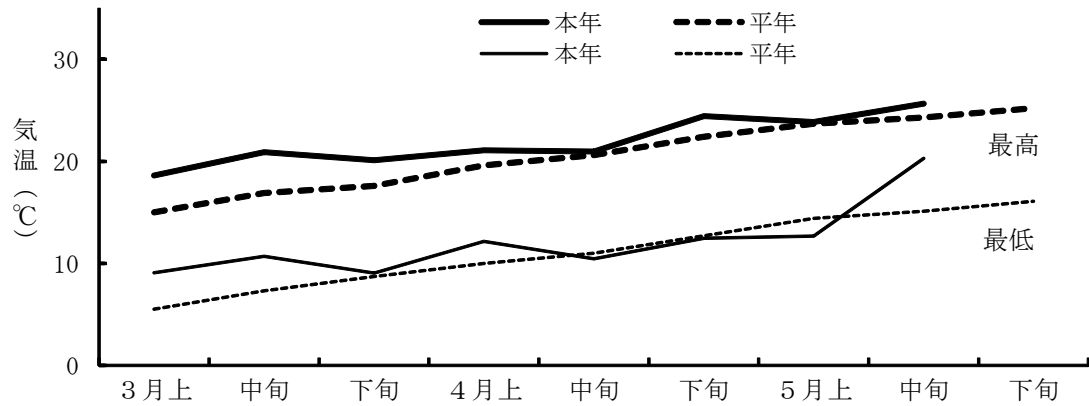
令和3年5月28日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（5月29日から6月28日） 令和3年5月27日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	20	30	50	九州南部では、気温は高く、降水量、日照時間は平年並みの見込み。奄美地方では、気温は高く、降水量は平年並みか多く、日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	10	30	60	
降水量	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	20	40	40	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	40	20	

II. 2～4月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稻	いもち病	やや少	並
		紋枯病	並	並
野菜	イチゴ	うどんこ病（県本土）	やや多	やや多
		炭疽病（県本土）	並	やや多
花き	キク（施設）	白さび病（県本土）	並	並
		ハダニ類（県本土）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土）	並	やや多
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
	ナシ	黒星病	並	並
		アブラムシ類	多	多
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		輪斑病	やや少	並
		もち病	並	並
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	やや多	多
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 2%)

：やや低い (－)

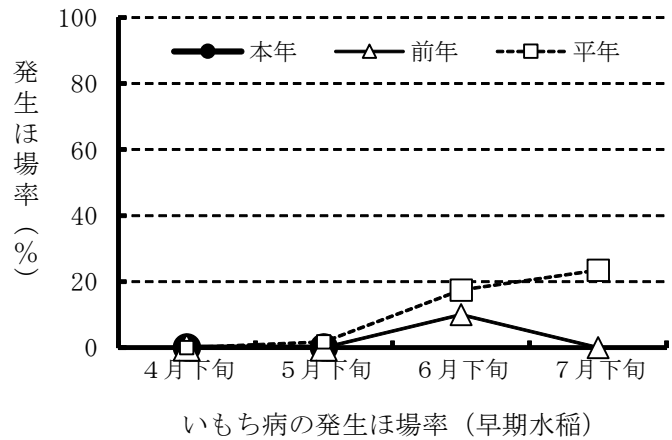
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので、早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 出穂期が梅雨期間にあたるので、常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

(ウ) 穂いもち防除は穂ばらみ後期に行うが、時期を失しないよう注意する。

(エ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年 0%)：並

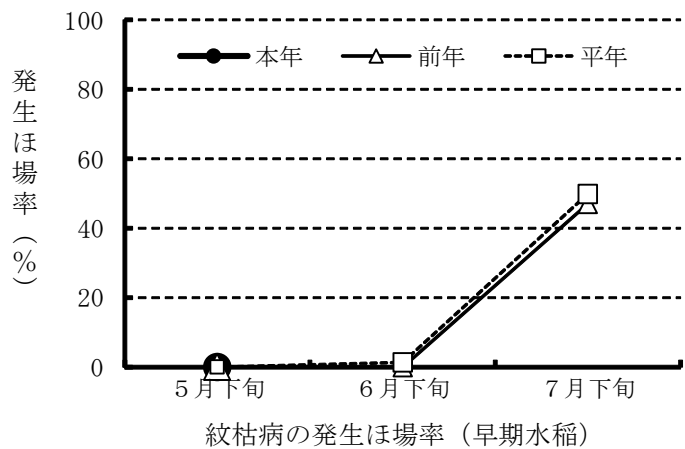
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は上位葉鞘への進展期にあたる出穂1週間前から出穂期頃に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 過繁茂状態の水田では、発生が認められたら病勢の進展に注意する。

(エ) 前年に多発した水田では特に注意する。



(3) 海外飛来性害虫の飛来状況

ア セジロウソウの初誘殺日

- (ア) 予察灯 5月12日 (平年：5月24日)
 (イ) 大型吸引トラップ 5月15日 (平年：5月29日)

イ コブノメイガの初誘殺日 (フェロモントラップによる調査は2018年から開始)

- (ア) フェロモントラップ 5月18日 (2018年：6月20日, 2019年：5月29日, 2020年：5月20日)

ウ 予察灯および大型吸引トラップへのウンカ類の初誘殺日は、平年に比べて早い。また、フェロモントラップへのコブノメイガの初誘殺日は前年並みで、2018年、2019年に比べて早い。

エ 予察灯等への海外飛来性害虫の誘殺状況は、病害虫防除所のホームページで確認し、本田の見廻りを行うことで発生に注意する。

表1 予察灯(60W白熱電灯)でのウンカ類の誘殺状況 (農業開発総合センター内：(水田))

月/日	4/1~5/11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
セジロウソウ	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	11
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
セジロウソウ	2													
トビイロウンカ	0													

注) 調査開始日は、4月1日。

表2 大型吸引トラップでのウンカ類の誘殺状況 (農業開発総合センター内)

月/日	4/1~5/11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
セジロウソウ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	3
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
セジロウソウ	0													
トビイロウンカ	0													

注) 調査開始日は、4月1日。

表3 フェロモントラップでのコブノメイガの誘殺状況 (農業開発総合センター内：(水田))

月/日	5/1~5/11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3
月/日	5/25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5	6	7
コブノメイガ	5													

注) 調査開始日は、5月1日。

.....

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ基腐病について

5月末現在、一部の育苗ほや本ほにおいて発生が確認されていることから、被害の拡大を抑えるため、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 発病株は、見つけ次第速やかにほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) 発病株除去後は、周辺株への感染拡大を防ぐため、防除薬剤を組み合わせる複数回散布する。
銅剤は発病した株への効果はないため、発生初期からの防除に努める。
- (4) 本病は水が停滞しやすい場所での発病が多いため、ほ場の排水性を確保する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (http://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop-tech/nenndo/documents/82280_20210305130816-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/Stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotatR02_1.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第2版)



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和2年度版)

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ (苗床) (5月調査は令和元年から)

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率27% (前年22%)：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

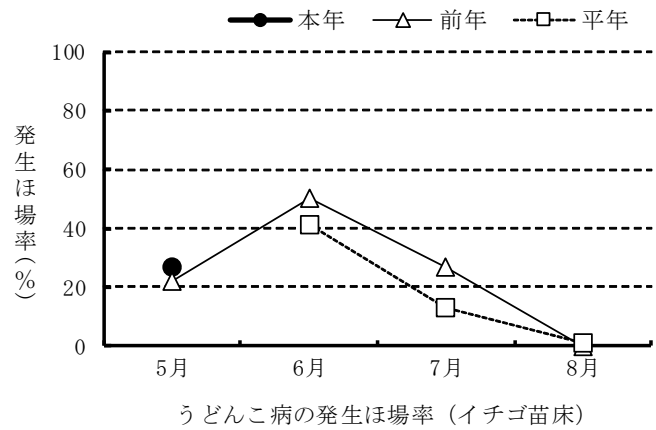
(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。

(オ) 薬剤によっては感受性が低下している可能性があるため、散布後は防除効果を確認する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率9% (前年0%)

: やや高い (+)

発生程度は低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

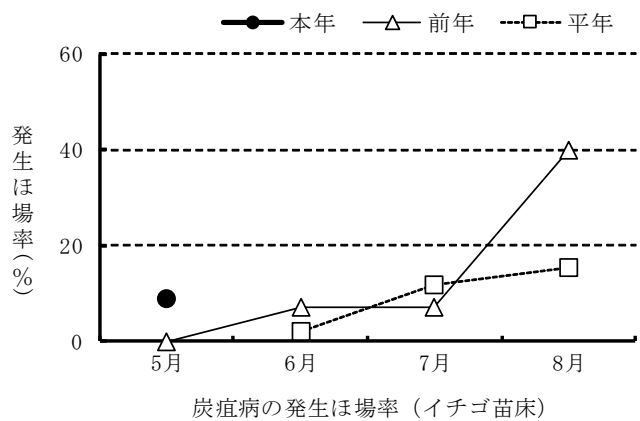
(イ) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。

(ウ) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

(エ) 薬剤による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(オ) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。

(カ) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。



Ⅲ. 花き（キク）

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

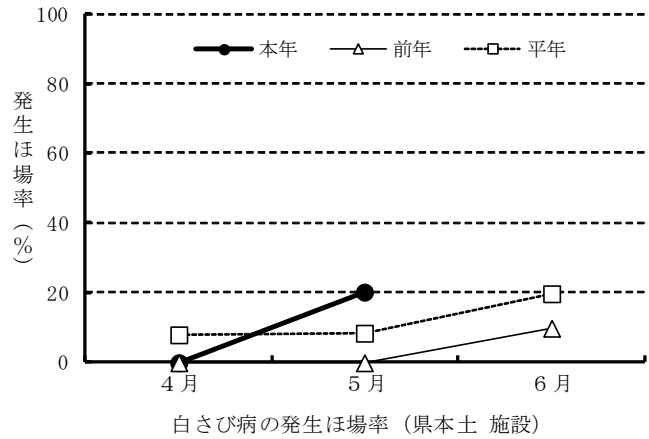
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平成9%）

：やや高い（+）

発生程度は低い（-）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(イ) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(ウ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

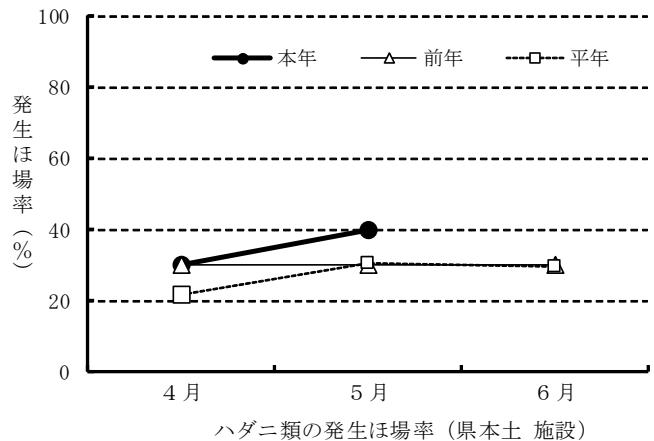
発生ほ場率40%（平成30%）

：やや高い（+）

発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

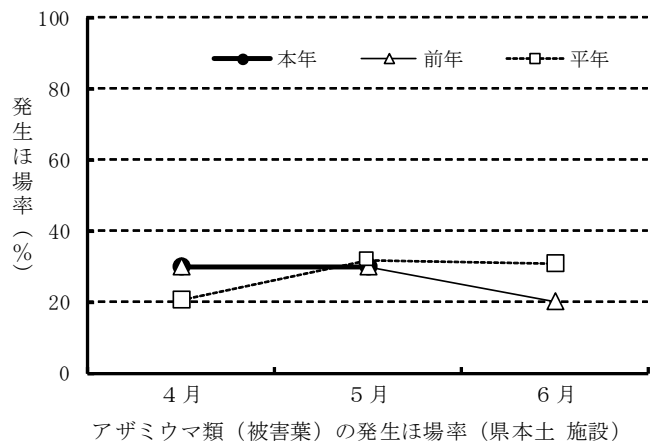
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30%（平成32%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介する。
- (イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。
- (ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。
- (エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。
- (オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。
- (カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 多

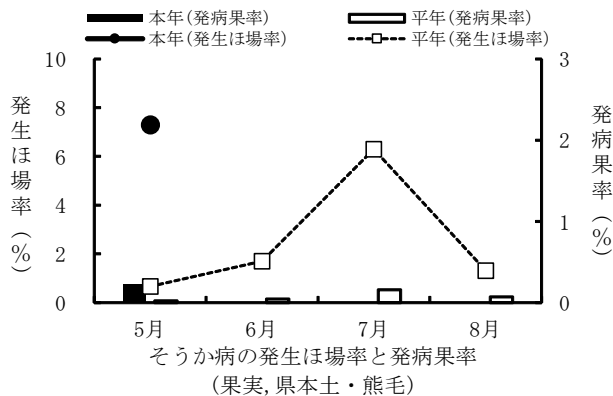
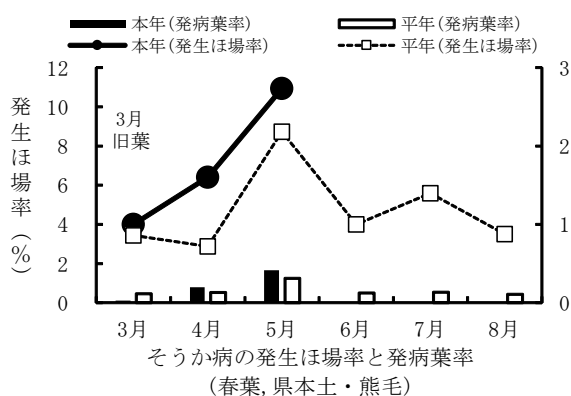
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	多
発生ほ場率	11 % (平年 7 %) : 並	7 % (平年 0 %) : 高い (+)
発病率	0.4 % (平年 0.3 %) : 並	0.2 % (平年 0 %) : 高い (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	14 % (平年 16%) : 並	0 % (平年 0 %) : 並
発病率	2.9 % (平年 0.3%) : 多 (+)	0 % (平年 0.1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉, 発病果は伝染源となるので, ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

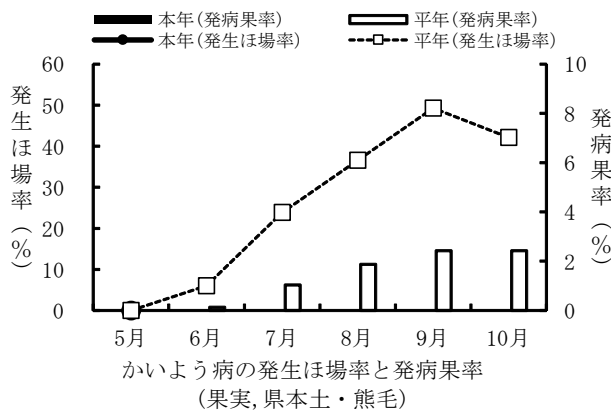
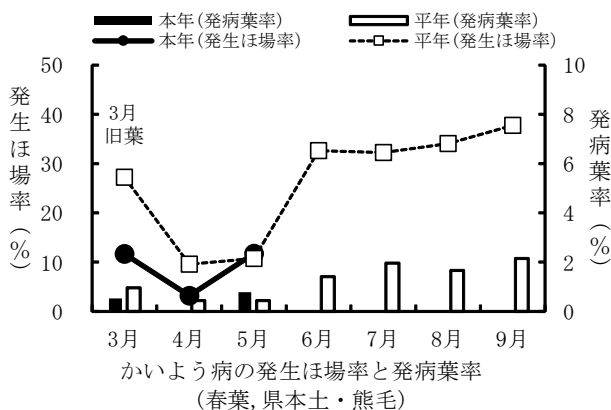
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

< 県本土・熊毛地域 >

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	12 % (平年 10%) : 並	0 % (平年 0 %) : 並
発病率	0.8 % (平年0.4%) : やや高い (+)	0 % (平年 0 %) : 並



< 奄美地域 >

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	14 % (平年 16%) : 並	0 % (平年 0 %) : 並
発病率	0.1% (平年0.2%) : 並	0 % (平年0.1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 強風雨等による葉や果実への傷口発生を防ぐため、防風林、防風樹の管理に努める。
- (イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

< 県本土・熊毛地域 >

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：少

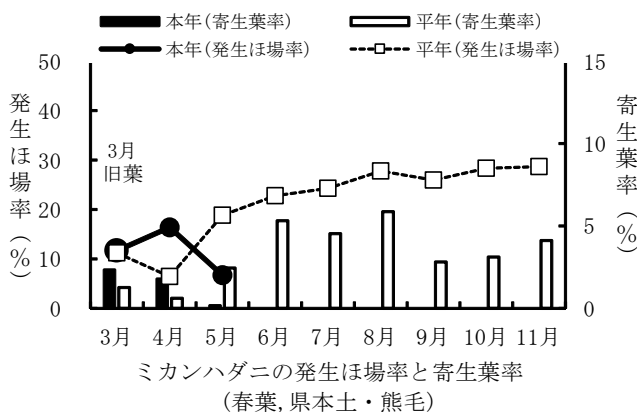
発生ほ場率 7 % (平年19%)

: 低い (-)

寄生葉率0.2% (平年2.4%) : やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並
 発生ほ場率0% (平年 3%)：並
 寄生葉率0% (平年0.2%)：並

(イ) 気象予報

気温：高い(+)
 降水量：平年並か多い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

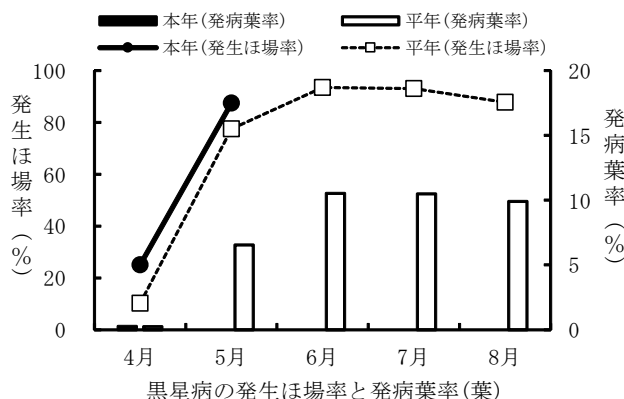
(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。
 (イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。

2. ナシ

(1) 黒星病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 並



イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	葉	果実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	88% (平年 78%) : やや高い(+)	50% (平年 75%) : やや低い(-)
発病率	0.9% (平年5.7%) : やや低い(-)	0.5% (平年7.1%) : 低い(-)
発生程度	低い(-)	低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は新梢伸長期までを重点に、約10~14日間隔で予防散布を行う。なお、薬剤散布は天気予報に留意し降雨前に行う。
 (イ) 耐性菌の発生リスクが高まるので、同一系統薬剤(SBI剤等)の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

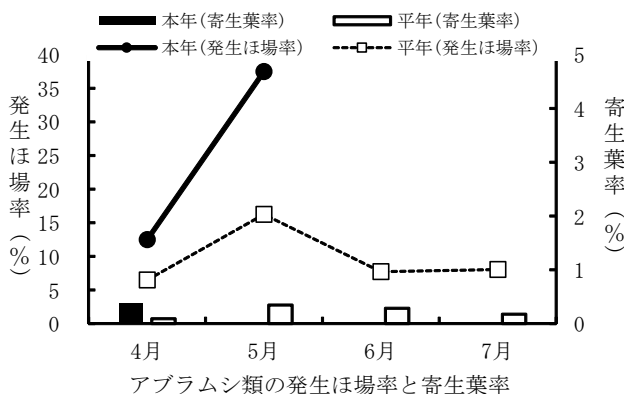
(2) アブラムシ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多
 発生ほ場率 38% (平年16%)
 : 高い(+)
 寄生新梢率4.4% (平年0.4%)
 : 高い(+)



(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 園地によって発生量に差がみられるので、発生状況をよく把握して防除を行う。

(イ) 薬剤散布が遅れると縮葉して十分な防除効果が得られないので、早期防除を心掛ける。

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。

イ 薬剤散布間隔は、散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。

ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 成虫は5月下旬から発生し、6月上旬～中旬が羽化最盛期になる。

イ 産卵は6月中旬頃から始まり7月上旬が盛期で、8月まで続く。

ウ 朝夕、成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。

エ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

時 期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生 態	← 成虫発生期			← 産卵期			← 幼虫食入期			←		
物理的 防除法	← 成虫の捕殺			← 卵の圧殺・幼虫の捕殺			←			←		
生物的 防除法	↓			バイオリサ・カミキリ施用			←			←		
薬 剤 防除法	←			← 殺虫剤散布			←			←		

注) 県本土の発育ステージを示す。

V. 茶 樹

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

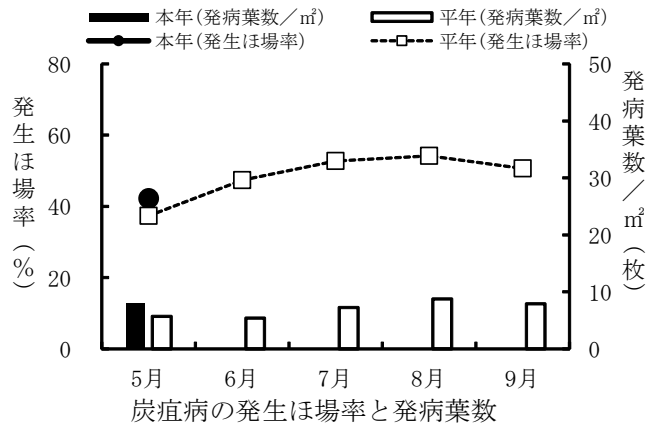
(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率42%（平年37%）：並

1㎡当り病葉数8.0枚（平年5.7枚）：並



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 摘採残葉での発生に注意し、本病に弱い品種や多発ほ場では三番茶生育初期に防除する。

(イ) 三番茶の生育期に降雨が続き、治療効果のある薬剤を散布する場合は、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

(ウ) 三番茶芽の摘採後に残る下位1～2葉は、感染を防ぐため、萌芽～1葉期に予防防除する。

(エ) 多発状態の続く茶園は、整・剪枝（深刈り等）により伝染源を除去する。

(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

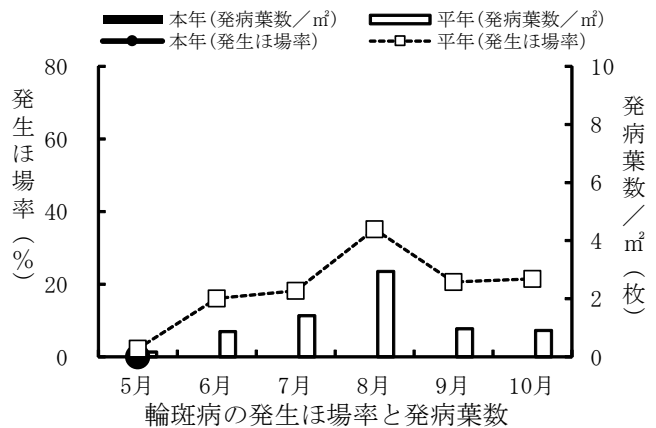
発生ほ場率0%（平年2%）

：やや低い（-）

1㎡当り病葉数0枚（平年0.2枚）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 三番茶の摘採期に降雨が多い場合は、感染・発病に注意する。

(イ) 防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(ウ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

(エ) ストロビルリン系薬剤耐性菌の発生が確認されている地域では、本系統薬剤の使用を避け、未発生地域でも使用は年1回とする。

(3) もち病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年1%）：並
1㎡当り病葉数0枚（平年0.2枚）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉の多い茶園では、三番茶生育初期に炭疽病との同時防除を行う。
- (イ) 多発生すると摘採葉中に病葉が混入し、製茶品質の低下をもたらすので、早めに摘採し、被害を回避する。
- (ウ) 常発園では、周辺の樹木等を除去して風通、採光を良くし、陰湿条件にならないようにする。

(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 多
チャハマキ 多
- (ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 早い
チャハマキ 早い

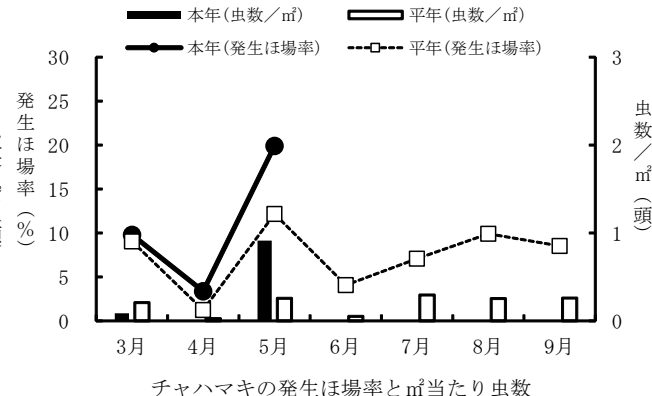
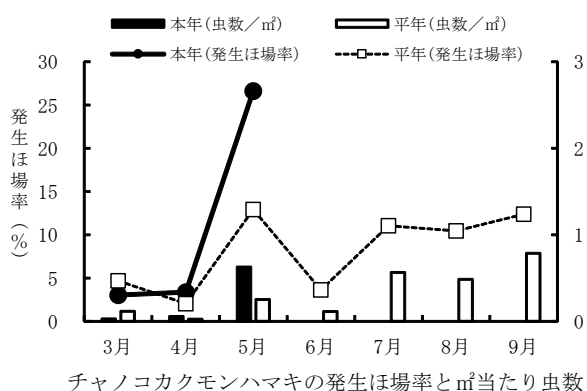
イ 予報の根拠

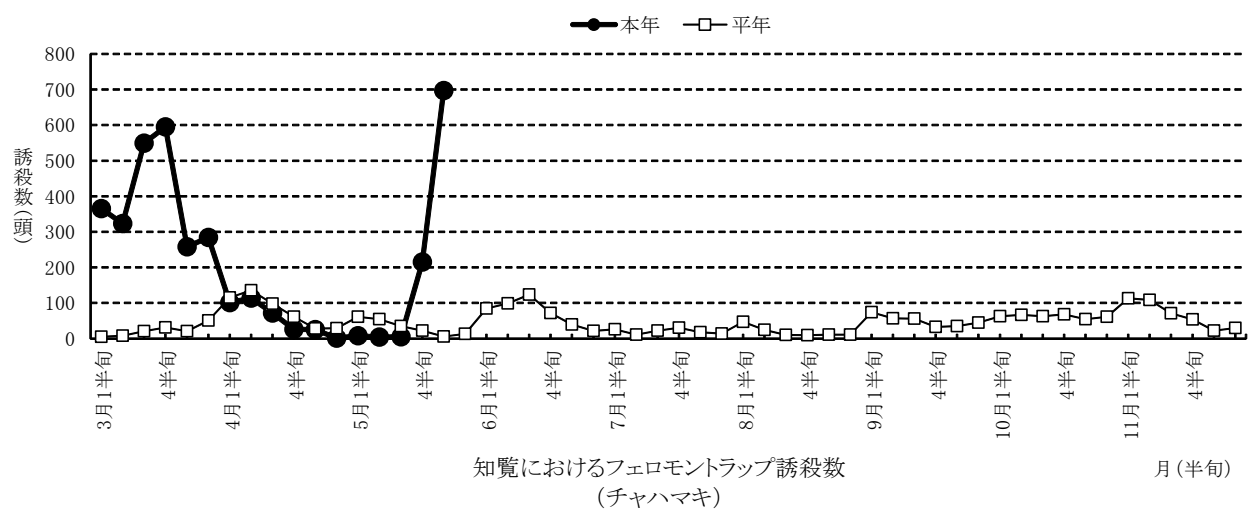
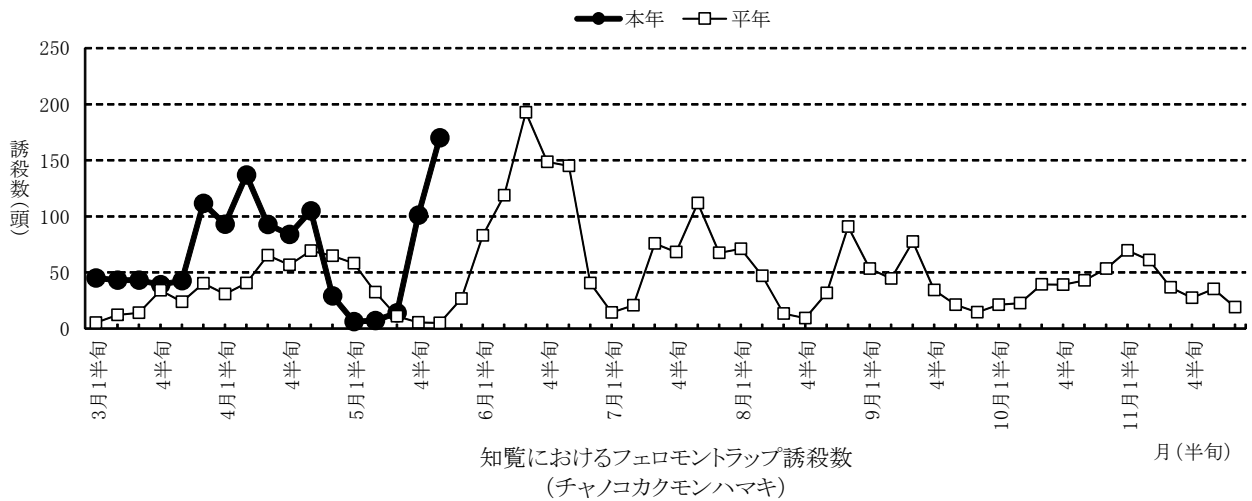
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	多	やや多
発生ほ場率	27%（平年13%）：高い（+）	20%（平年12%）：やや高い（+）
虫数（1㎡当り）	0.6頭（平年0.3頭）：多（+）	0.9頭（平年0.3頭）：多（+）
【知覧町フェロモントラップ】		
誘殺数（第3月1半旬～5月5半旬）	1,163頭（平年568頭）：多（+）	3,642頭（平年781頭）：多（+）
第一世代の発蛾ピーク	早い	早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。
- (イ) 摘採との関係で、適期防除ができない場合は、摘採後早めに防除を行う。





(5) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多
- (ウ) 発生時期 やや早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多

【巡回調査】

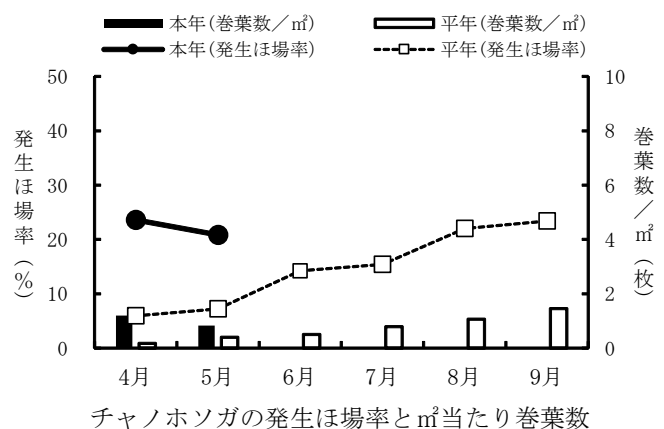
発生ほ場率 21% (平年7%)
 : 高い (+)
 m²当たり巻葉数 0.8枚 (平年0.4枚)
 : やや多 (+)

【知覧町フェロモントラップ】

5月(第5半旬まで)の誘殺数 6,029頭(平年1,517頭): 多(+)
 第一世代の発蛾ピーク: やや早い

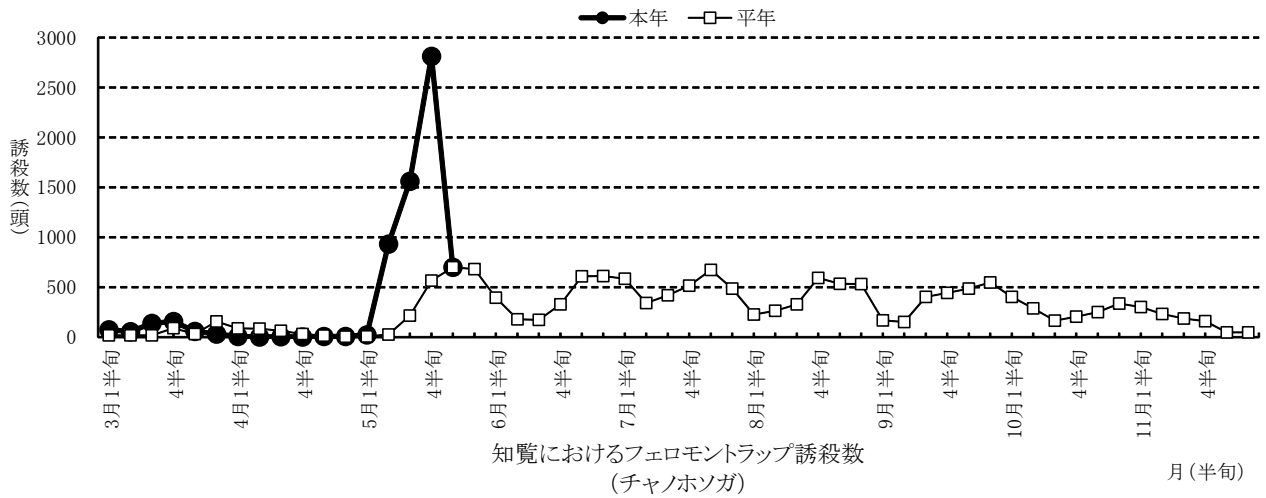
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 三番茶期の萌芽～1葉期に防除を行う。
- (イ) 萌芽～1葉期頃に葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認してから薬剤を散布すると効果的である。



(ウ) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

(エ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
チャノキイロアザミウマ 少

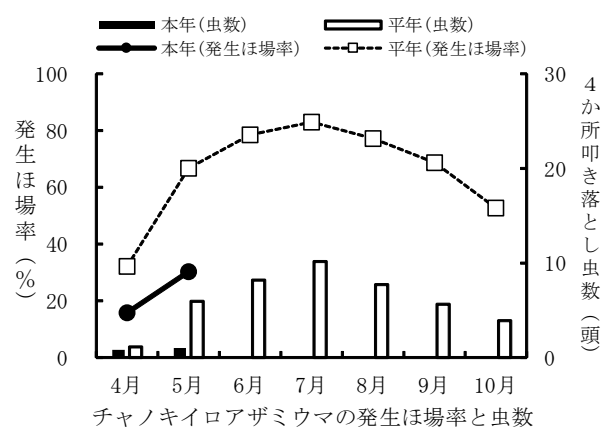
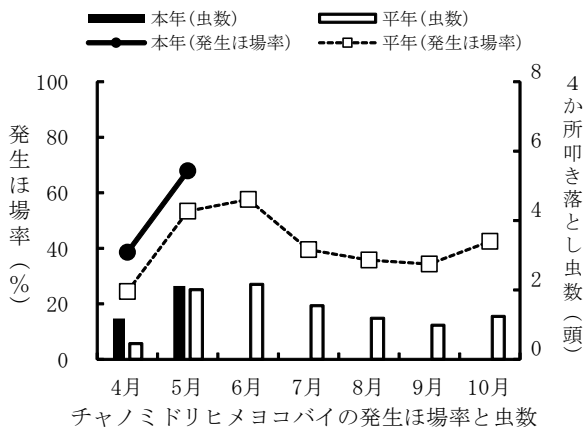
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	少
発生ほ場率	68%(平年 53%) : 高い (+)	30%(平年 67%) : 低い (-)
虫数(4か所叩き落とし)	2.1頭(平年2.0頭) : 並	1.0頭(平年6.0頭) : 少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除するが、発生が多い場合は摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後の防除も必要である。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+），（-）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。